(1)花ユリ優良品種候補「5226」について

中央農業試験場園芸部花きそ菜科

1.はじめに

本道は新潟県に次ぐ、花ユリ[1)]の球根生産地[2)]であるが、切花生産[3)]はきわめて少ない。ユリの切花に対する需要が周年化する中で、寒地である本道の特徴を生かした夏場の切花生産の有利性が増大している。また、本道の特産花きとして、球根生産から付加価値の高い切花生産まで道内で行なうことの意義は大きい。「5226」はこうした背景をふまえて露地夏切り用切花品種として育成したものである。

2.育成経過

昭和48年に「仁王」×「デスチニー」よりの「4737」を母とし、「664」(栗山町藤島氏育成系統)を父として交配し、181の実生個体より昭和51年に選抜したものである。昭和54年より中央農試において、また、昭和59年より道南農業試験場、旭川市園芸センターの2場所を加えて生育、開花特性等の検討を行なってきた。

3.特性の概要

蕾着色期、開花期は「金扇」[4)]より12～13日遅く、7月下旬の開花となり道内で栽培されている花ユリの中では最も遅い。開花の向きは上方からやや斜上方の受咲きで、切花に好適する。花弁色は「金扇」に似た鮮明な黄色で外花被がやや反転する。花径は「金扇」よりやや小さいが、一花茎あたり花蕾数は「金扇」よりやや多い。草丈は80cm前後で「金扇」より高性で葉数も多い。葉も「金扇」よりやや大きく、テリ葉で美しい。また、止め葉下節間長が「金扇」より短く、草姿のバランスがよい。一般栽培において葉枯れ症状は「金扇」と同程度で特に実用上問題とならない。

4.普及態度

露地切花用として全道一円に普及する。なお、暑い時期の開花となるので、浅植とならないよう注意する他、敷きわらなどを行い、土壌水分の保持に努める。

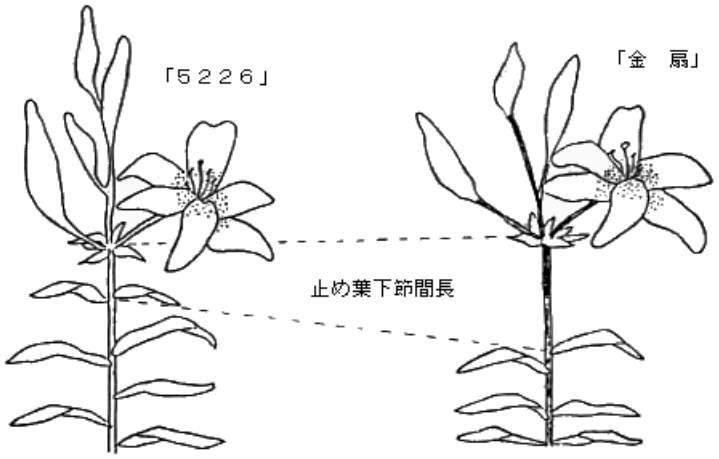
表1　育成地における特性概要

品種または系統名	早晩性	開花期(月日)	花の向き	花色	花径(cm)	花蕾数(個)	草丈(cm)	止め葉下節間長(cm)	葉枯れの程度
5226	極晩生	7.24	上～ヤ斜上	鮮黄	15.9	5.9	87	4.0	無～微
金扇	中生	7.12	上～ヤ斜上	鮮黄	16.6	4.6	68	9.5	無～微

表2　育成地以外における特性概要

場所	品種または系統名	開花期(月日)	花径(cm)	花蕾数(個)	草丈(cm)	止め葉下節間長(cm)	葉枯れの程度
道南農業試験場(大野町)	5226	7.26	16.2	4.2	62	4.9	無
	金扇	7.12	16.9	4.6	58	6.3	無
旭川市園芸センター	5226	7.30	16.2	6.2	66	5.1	微～少
	金扇	7.21	17.1	5.5	58	7.6	微～少

注)中央農試は秋植え、道南農試、旭川市園芸センターは春植えによる。



---

1)"花ユリ"という用語は北海道内でのみ使用されている呼称である。道内に栽培の多い食用ユリとの区別の必要性から鑑賞用のユリに対して使われているものと思われる。ユリの分類の中では一般に"スカシユリ"または"スカシユリ系交雑品種"といわれるものである。

2)スカシユリの球根栽培面積は全国で約100haあり、その殆んどを新潟県(55ha)と本道(45h)の2産地で占めている。

3)スカシユリの切花は高知県(17ha)、埼玉県(7ha)などで施設を中心に、球根生産県の新潟県127ha)では露地を中心に生産されている。一方、本道における切花栽培は2.2ha(59年度)に過ぎない。

4)「金扇」：栗山町の藤島昇吉氏により昭和36年に作出され、42年に発表された品種で、黄色のスカシユリ系交雑品種としては最も人気が高く、栽培面積も多い切花用品種である。

目次へ戻る